The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

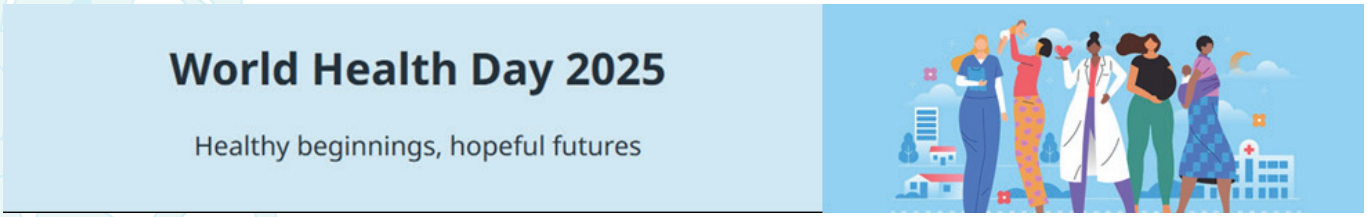
Title	日本WHO協会主催「世界健康デー2025」イベント
Author(s)	日本WHO協会
Citation	目で見るWHO. 2025, 93, p. 6-9
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102829
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日本WHO協会主催「世界健康デー 2025」イベント



毎年4月7日は「世界健康デー」として世界中で人々の健康を願い、祝うイベントが行われています。日本では例年日本WHO協会が主催しての祝祭イベントが行われてきていますが、今年は大阪商工会議所の国際会議ホールにて開催されました。今年のテーマとしてWHOが選んだのは「Healthy beginnings, Hopeful futures(健やかなはじまり、希望のある未来へ)」です。WHOはこれに関連して「母親と赤ちゃんの健康は、健康な家族と地域社会の基盤であり、私たちすべてに明るい未来を約束するもの」であり、「すべての女性と赤ちゃんの生存と成長を支援」し、「女性の声を聞き、家族を支援」します、とのメッセージを発表しています。

開会

日本 WHO 協会理事長の中村安秀さんが、この日は WHO が設立された日であること、WHO 憲章では「健康は平和の礎（いしずえ）」であると高らかに謳っていることを紹介し、特に昨今の世界情勢を考えると重要であると指摘されました。また、昨年までは世界「保健」デーと訳していたが、保健医療者だけでなく、広く一般市民の方々にも親しみやすく、一緒に楽しく健康というものを考えたいという思いで、今年からは世界「健康」デーと改訳したと報告がありました。（写真１）

続いてアドバイザリーグループである聖路加国際大学名誉教授　遠藤弘良さん、川崎市健康安全研究所参与　岡部信彦さん、笹川保健財団会長　喜多悦子さんからのメッセージが紹介されました。

動画優秀作品表彰

昨年の世界健康デーのテーマであった「My health, my right（私の健康、私の権利）」を題材として募集した動画作品の中から選ばれた、優秀作３点の上映と表彰が行われました。受賞作品はふわぽよ宇宙人さんの「Maison de Earth」、関西学院千里国際高等部　松岡瑠拳アゼンさんの「Artistic Devolution」、星野小冬さんの「『あたりまえ』をみんなでつくろう」でした。やや抽象的なテーマであったにもかかわらず、このテーマをそれぞれの視点からきちんと捉え、的確に表現された素晴らしいものに仕上がっていました。（写真２）（図１）

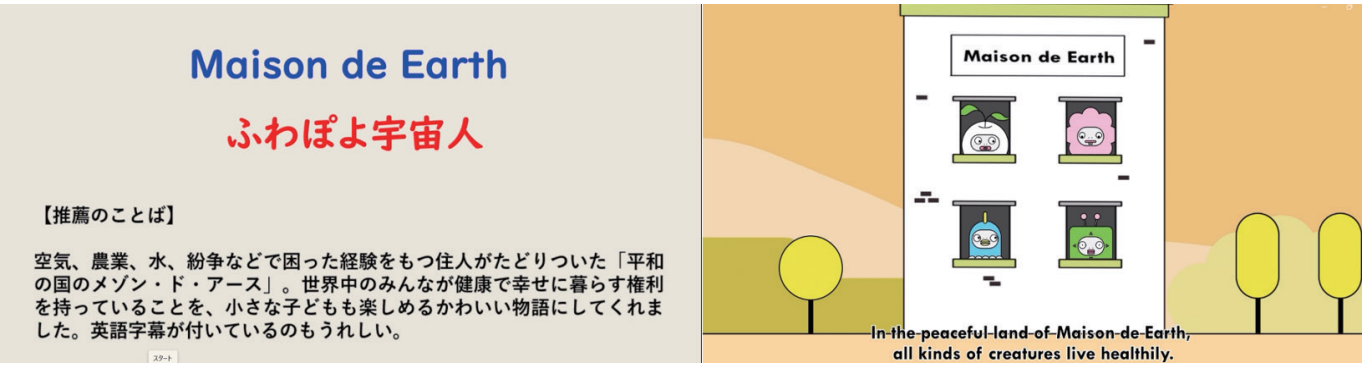
講演・パネルディスカッション

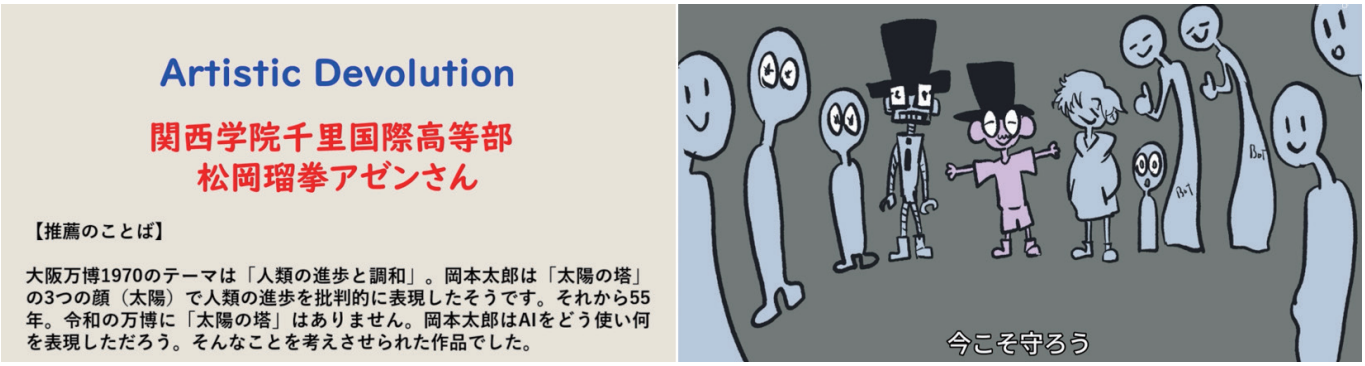
メインイベントとして、今年のテーマ「健やかなはじまり、希望のある未来へ」をテーマとしたシンポジウムが行われました。登壇は国際保健医療大学副学長の山本尚子さん、大阪母子医療センター副院長の和田和子さんとファシリテーターの日本 WHO 協会理事長の中村安秀さんで、まずはそれぞれからご講演をいただきました。

中村さんからは、日本ではあたりまえの母子手帳が、昭和 23 年に世界に先駆けて日本で導入されたものであること、母と子の記録を一冊にまとめ、しかも病

写真１　開会あいさつの中村安秀理事長

写真２　動画優秀作の表彰風景





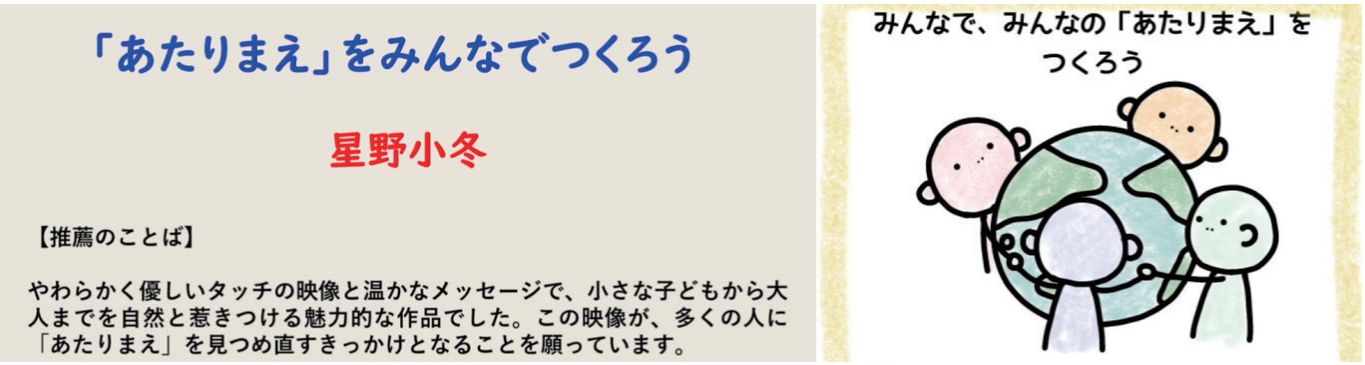


図1　動画優秀作品3点

院に保存するのではなく家庭で保管するという点が画期的であったこと、また当時は母と子の命を守るための緊急栄養支援として、食料配給の「加配」手帳としての役割が重要であったということが紹介されました。また赤ちゃんの成長発達にとって「人生最初の 1000 日」がいかに重要かも強調されました。そんな誰一人取り残さないはずの母子手帳ですが、実はこれまで成長曲線記録欄が体重 1 kg から始まっていたために非常に小さく生まれた「リトルベビー」は除外されてしまっていました。それが今年の 4 月から 0kg、20cm から記録できるようになったのは、大変うれしいニュースです。

山本さんは元 WHO の事務局長補であった経験から、過去の世界健康デーのテーマを振り返りつつ、SDGs の目標の相互依存性を示しつつ健康が保健医療専門家だけで解決できるものではないことを示されました。特に貧困と不平等、栄養（農業漁業の問題を含む）、水と衛生の問題そして誰もが医療を受けられるユニバーサル・ヘルス・カバレッジ（UHC: Universal Health Coverage）の重要性を強調されました。WHO 設立以来、国際社会は、複雑な政治の中にあっても人の命や健康を守ることにおいては協力していこうという点では一致し WHO を支えてきました。これからも世界の情勢はいろいろ変わっても、誰ひとり取り残さないように人権、命、健康を守るという理念をもち続けたいものです、と語られたのが印象的でした。そのためには、WHO や政府だけではなく、多様な市民団体、企業、アカデミアなどの連携を強め、一般の人々がそれを監視し、支援するという形にしていかなければならないと述べられたのは全くその通りです。（写真３）

和田さんは日本の臨床の現場における新生児医療の進歩とそれを支えてきた数々の制度や努力について語られました。1994 年から周産期医療システムや総合周産期センターを整備し、どんな新生児でも救えるようにしてきた結果、2018 年のユニセフのレポートで「日本は子どもが生まれるのに世界で最も安全な場所である」とされるに至ったことは素晴らしい成果です。しかし、一つ解決するとまた新たな課題が現れてくるもので、現

写真3　山本尚子さんのご講演

写真4　和田和子さんのご講演

写真5　パネルディスカッションの様子

写真6　閉会あいさつの安田直史理事

在では日本の小児新生児医療は医療的ケア児の問題などに取り組んでいます。同時にこれまでの経験を活かしてアジアの新生児医療を改善していくための協力もしています。（写真４）

パネルディスカッション

Healthy beginnings（健やかなはじまり）

世界の状況を見ると、経済、紛争、自然災害などの問題や、女性の置かれている立場の問題もあって改善のスピードが必ずしも十分でない国もあるが、データを見れば少しずつ良い方向には向かっています。ただし取り残されている人がいないかどうかという視点は、特に自分で声を挙げられない子どもの権利については注目していく必要があります。

日本で臨床医療をしていると見落としがちだが、日本の新生児死亡率が低いのは単に医療だけの問題ではなく、インフラが整備され、水がきれいで、教育が行きわたっているなどの様々な要因の総合的な成果だということを再認識する必要があります。人々の健康は技術の進歩と経済発展だけで解決できるものではなく、社会学、人類学、哲学などの分野の人たちからもいろいろ学びながら考えていかなければならないのです。

日本では赤ちゃんや妊婦や病人など小さなもの、弱いもの、困っている人を守ろうとする気持ちから、社会をあげて赤

ちゃんの救命率など一番弱いところを一つずつ埋めていった結果、結局全体のレベルが上がってきたのだと思います。その知識、技術、経験で日本だけでなくアジアや世界に貢献できると信じています。

最近はAIや技術の進歩などが著しく、医療の分野では可能性がいっぱいあると思いますが、これが人々を幸せで豊かにするのか、そうでないのかは、まさに試金石でしょう。公衆衛生・保健医療にとってフェイクニュースのまん延は大問題であり、正しい情報をどう伝えるかということが大きな課題になっています。

また、とりわけ性と健康と人権の問題に関する中学生ぐらいからの教育の取り組みは日本の課題だと思われます。フジテレビやジャニーズ事務所で性加害の問題が起こったということは、私たちの世代がきちんと性と人権の問題に取り組んでこなかったためであり、「自分のからだは自分のものだ」ということをきちんと自覚し、互いの人権を尊重する様な教育がとても重要です。

さらに若い女性のやせ（願望）にも問題意識をもっていますし、子ども時代の貧困から、健康に育ったとしても社会経験の乏しさや自己肯定感の低さをもたらすという問題に対しても、社会としてどう支え、取り組んでいくかということを考えていかなければなりません。

Hopeful futures（希望のある未来へ）

今の若い人には世界とつながれる機会や手段はいろいろ増えているので、世界の人々といっしょに考えたり、共感したりすることができると思います。私たちも希望ある未来を求めて一緒にいろいろやっていきたいと思っています。

少子化と男女共同参画の中で、日本の女性はもっと子どもを産め、もっと働け、と言われ、とてもプレッシャーを受けていると思います。そういうネガティブなものではなく、赤ちゃんを産むとこんな素晴らしいことがあるよ、というポジティブで希望ある未来に対するメッセージを発信することも大切なのではないでしょうか。

赤ちゃんを一度抱っこしてみるとかわいいということが体感としてわかるのですが、少子化とともに、残念ながら今の日本の子どもや若い人には赤ちゃんを抱っこしたことがない人が多くなっています。WHO協会では今後一年間いろんな形でいろんな人に参加いただいて、Healthy beginnings, Hopeful futuresを多角的に取り上げ、議論していきたいと思っています。（写真５）

閉会

最後に、WHO協会理事の安田直史さんがあいさつし、本日のイベントへのみなさんのご参加に礼を述べました。特に、Healthy beginningsは必ずしもHopeful futuresの十分条件ではなく、新たに生まれる1億3200万人のすべての子にHopeful futuresを届けるためには、保健医療者だけでなく、いろいろな分野の人々が協力して行動していかなければならないのだというメッセージで締めくくりました。（写真６）

謝辞

このイベントの運営をボランティアで支えていただき、ご尽力下さいましたプロアシスト株式会社の社員の皆様、大日本除虫菊株式会社の社員の皆様、日本グローバルヘルス学会学生部会の運営委員の皆様、そして司会を務め会を盛り上げて下さいました大阪大学の當山紀子様に心よりお礼を申し上げます。（写真７）

写真7　関係者の集合写真